

⑤ 海老名の相模国分寺跡などを訪ねる資料

2019. 5. 22 秋山

相鉄海老名駅 9:30—中央公園—大櫓—国分寺（銅鐘・尼の泣き水供養碑）—逆川（さかさかわ）の記念碑—逆川の河岸跡—国分尼寺跡—国分寺跡—温故館—七重の塔（解散）

三つの鉄道が乗り入れている海老名

わが国の鉄道施設は、明治 18 年(1885)頃から 5 年間ほどの第一次、明治 25 年(1892)頃から 6 年間ほどの第二次、大正 10 年(1921) から昭和 5 年(1930)頃までが、第三次鉄道ブームでした。特に明治 35 年(1900)の**私設鉄道法**の施行が、私設建設の契機となりましたが、明治 36 年(1906)に**鉄道国有化**が交付されたことから、私設建設の流れが止まってしまいました。というのも、民間で鉄道を建設しても国に吸い上げられてしまう懸念があったからです。

また（私設鉄道法）は物価が上がって営業に影響が出て、運賃の上限が決められていたので、経営が難しくなるのではないかと懸念がありました。政府も鉄道に対する期待を知りつつも、国有化のために多大な資金を投入したので、鉄道建設の余力はなかったのです。ところが明治 43 年(1910)**軽便鉄道法**が施行され、軽便鉄道の敷設が盛んになりました。これは手続きが私設鉄道法より簡素化され、運賃の上限の制限もなく改定できたからです。

海老名地域では大正 10 年頃から昭和 5 年ころまでの第三次鉄道ブームの中で敷設事業が始まりました。その最初は JR 東海道本線の茅ヶ崎駅と JR 横浜線の橋本駅を結ぶ現在の**相模線**で、昭和 6 年(1931)に全線開通しました。つぎの鉄道建設は**相模鉄道**（相鉄線）です。工事が始まったのは大正 13 年(1924)で、路線は東海道線の保土ヶ谷駅～海老名村と決まっていたのですが、国側の変更と関東大震災の影響もあり、昭和 2 年(1927)になって横浜停車場（JR 横浜駅）に決まりました。

また小田原急行電鉄は当初の計画では、東京市麴町平河町を基点にしていたのですが、新宿に変更して昭和 2 年(1927)に新宿～小田原間が開通しました。

七重の塔のモニュメント

海老名市のシンボルになっている七重の塔は、平成 4 年(1992)に市制 20 周年を記念して観光の象徴として建てられました。奈良時代の海老名にあった相模国分寺の七重の塔の三分の一に縮小して再現したレプリカです。塔の高さは約 22 メートルの鉄筋コンクリート造りで、本物の仏塔ではありません。

音坂

大山道の一部で国分宿の出口にありました。音坂を登り切った所に旅人相手の旅籠や料亭がありました。そこで使われていた井戸の水を汲み上げる音が、坂に響き渡ったことから、この名がついたといわれています。旅籠はもともと旅の時、馬の飼料を入れる



七重の塔

籠（カゴ）のことです。それが旅人の食糧等を入れる器、転じて宿舎で出される食事の意味になり、食事を提供する宿屋のことを旅籠屋、略して旅籠とよぶようになりました。江戸時代の宿場ごとに多くの旅籠があって、武士や一般庶民の泊り客で賑わいました。

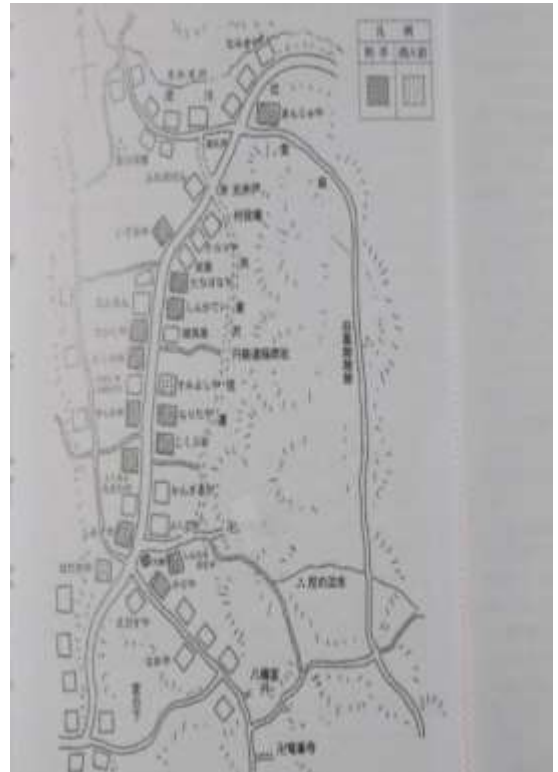
海老名の大櫓（けやき）

海老名の大櫓の名で親しまれています。樹齢580年前後と推定されている巨木です。この大櫓には、相模湾が深く内陸に入り込み、このあたりが入江になっていた頃に、漁師が舟をつなぐために打ったケヤキの杭が根付き、枝を張って成長したものと伝承があり、「逆さケヤキ」ともいわれています。

国分新道絵図

明治30年代（1874）の最盛期頃の国分宿の店の配置を示した図です。当時の海老名の中心街であり、宿屋のほか料亭や居酒屋など多くの店が軒を連ね、大変賑わったといわれています。八王子道との交差点を辻と呼び、江戸時代には高札場がありました。

国分新道絵地図



国分寺（高野山真言宗）

本尊は薬師三尊像で、木造薬師如来立像は、作風から室町時代南北朝期（14世紀後半）に铸造されたと考えられています。月光菩薩立像は、日光菩薩を真似た形跡があることなどから、近世の作と考えられています。天平13年（741）のいわゆる「国分寺建立の詔」によって創建された相模国分寺の法灯をついでいます。相模屈指の寺院です。

国分寺・銅鐘 中世海老名氏の一族である国分季頼（すえより）が成応5年（1292）に国分尼寺（こくぶんじ）に寄進したものです。作者は銘文から鎌倉円覚寺や金沢の称名寺などの梵鐘を手掛けた名工物部国光とされています。国分寺鐘は、口径に対して高さがあり、胴部の膨らみがほとんどないので、全体にすっきりした形をしています。



国分寺



尼の泣き水供養碑

尼の泣き水（供養碑） 天平13年（741）聖武天皇は、国ごとに国分寺と国分尼寺を建てるように命じ、相模の国では海老名の地に、国分寺と国分尼寺が建てられました。その頃、

若い漁師と国分尼寺の尼さんが恋に落ちました。ある漁師が困った様子で尼さんに、「七重の塔の屋根の飾りが輝くので、魚が逃げてしまい、獲れない」と話しました。その夜漁師のことを思うあまりに、尼さんは国分寺に火をつけ、国分寺は焼けてなくなりました。尼さんは捕らえられ、丘の上に生き埋めされ、刑に処せられました。その後、不思議なことに、その場所から湧き水が流れ出て、村人は尼さんが罪を詫びて流しているといっって、その湧き水を「尼の湧き水」と呼びました。海老名の伝説です。

場所は海老名小学校の上の台地であって、昭和 40 年頃まで清水が湧き出ていましたが、いつとなく枯れてしまいました。その場所の供養碑は、現在は国分寺の境内に移されています。

逆川記念碑（さかさかわ）

逆川は人工の水路といわれ、目久尻川の上流に堰を築き水を取り入れ、伊勢山の南側を回って国分寺、国分尼寺へと流れ、その西の谷から海老名耕地に流れていました。この付近で伊勢山を迂回して、南から北へ、目久尻川の低地から台地上に流れており、逆川の由来となった場所に記念碑が建てられました。



逆川の記念碑

逆川は後に現在の相鉄線の手前で西に流路が変更され、新堀と呼ばれています。



逆川の模式図

逆川の発掘調査により平安時代以前に造られ、船着き場と推定されるような遺構が確認されていることから、「運河のような役割があったのではないかと推定されています。昭和 40 年代までは水が流れていましたが、次第に埋め立てられて、ごく一部の地形にその面影を見ることができます。

目久尻川の由来 昔この川に河童が住みついて悪さをしていました。そこで地元の人々はこの河童を捕えて目をくじり取ってしまいました。という出来事からこの川を目久尻川と呼ばれるようになりました。

相模国分寺跡

天平 13 年（741）の国分寺建立の詔（みことのり）によって建立された寺院跡です。諸国の国分寺でも珍しい法隆寺伽藍配置で、発掘調査によって東西 240m、南北 300m 以上という広大な寺域であったことが分かっています。塔・金堂・講堂跡には礎石と基壇が残り、北・南面廊跡、僧房跡、鐘楼跡、経蔵跡や大型建物跡などが発掘調査により確認されま

した。

この中でも、塔跡（推定高さ 65m）や金堂・講堂跡（東西 40m、南北 31m）の規模は、諸国の国分寺の中でも最大級です。創建年代は、出土した瓦や土器などから 8 世紀中頃と考えられています。

相模国分寺跡は、江戸時代の地誌である「新編相模国風土記稿」にも記載されるほど古くから知られる遺跡です。国分寺としては珍しい法隆寺式伽藍配置を採用していることや塔・金堂・講堂などの礎石や基壇の一部が残っていることから、大正 10 年（1921）に国指定となりました。基壇(きだん)建物をその上に建てるためにつくった土盛りや石積のこと。



国分寺七重の塔の基壇



温故館

温故館

温故館は、相模国分寺跡が国指定史跡となった大正 10 年（1921）に海老名小学校の校庭に建てられた遺物陳列館がその始まりです。現在の温故館は、昭和 57 年（1982）に旧村役場建物を利用し海老名市郷土資料館として開設され、考古・歴史・民俗の各資料を収蔵・展示しています。温故館の建物は、大正 7 年（1918）に海老名村庁舎として建築されたもので、地方庁舎として当時よく採用された様式で造られています。

相模国分尼寺跡

天平 13 年（741）の国分寺建立の詔によって建立された寺院跡です。発掘調査によって金堂跡・経蔵跡・鐘楼跡・廊跡などがみつかっています。出土した瓦や土器などから 8 世紀後半頃に完成したと考えられています。相模国分尼寺跡は「新編相模風土記稿」にも記載されていて、金堂や講堂、中門等の遺構の土壇が残っています。

発掘調査により金堂跡をはじめとする遺構の保存状態が全国的に見て、良好であることから平成 9 年に国指定史跡となりました。

海老名駅に戻り解散、

参考資料	海老名歴史さんぽ	海老名市教育委員会
	えびな歴史ものがたり上・下	海老名市教育委員会
	現地の解説板	